

## 平成29年度 学校いじめ防止基本方針

北九州市立 門司中 学校

### はじめに

いじめは、いじめを受けた児童生徒の教育を受ける権利を著しく侵害し、その心身の健全な成長及び人格の形成に重大な影響を与えるのみならず、その生命又は身体に重大な危険を生じさせる恐れがあるものである。

北九州市は、児童（生徒）の尊厳を保持する目的のもと、国・地方公共団体・学校・地域住民・家庭その他の関係者が連携の下、いじめの問題の克服に向けて取り組むよう、いじめ防止対策推進法（以下、「法」という。）第13条の規定に基づき、校長が、いじめの防止等（いじめの防止、いじめの早期発見及びいじめへの対処）のための対策を総合的かつ効果的に推進するために策定する。

#### （定義）

法第二条 この法律において「いじめ」とは、児童等に対して、当該児童生徒が在籍する学校に在籍している等当該児童等と一定の人的関係にある他の児童等が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているものをいう。

### 1 いじめに対する基本姿勢 「いじめ問題を見過ごさないために（北九州市教育委員会）」より

「いじめは、人間として絶対に許されない」という強い認識をもつこと  
「いじめは、どの学校でも、どの子にも起こりうる」という危機意識をもつこと  
「いじめられている子どもを最後まで守り抜く」という信念をもつこと

本校においては上記3つの考え方を基本に家庭・地域等と連携を図り、自校の課題を見出し、生徒の実態に応じた取組を図る。また、市や関係機関等と連携し、「いじめの防止」「いじめの早期発見」「いじめに対する措置」を適切に行う。

#### (1) 自校の課題

- ・相談したい内容があっても素直に打ち明けられず、自分で処理しようとする。
- ・相手の気持ちを考えきれず、軽はずみな言動からトラブルに発展することが多い。

#### (2) 学校としてなすべきこと

##### ① 教員の指導力の向上と組織的対応

- ・いじめ問題に適切に対応できるようにするには個々の教員のいじめ問題への鋭敏な感覚と的確な指導力を向上させる。
- ・特定の教員がいじめ問題を抱え込むことなく、機動的かつ組織的な対応ができるようにするため、各々の教職員の役割と責任を明確化する。
- ・教職員用の指導書「いじめ問題を見過ごさないために」等を中心に校内研修会を実施し、教職員のいじめに対する感度を高めるとともに、正しい認識を共通理解し組織的な体制を整える。
- ・教師一人一人がいじめ問題の重要性を正しく認識し、定期的なアンケートの実施及び面談を行うとともに、日頃から教職員間及び保護者との連絡を密にし、情報交換や共通理解を図る。

## ② いじめを見て見ぬふりをせず、声を上げられる学校づくり

- ・ 周囲の子どもがいじめについて知っていながらも、「言ったら自分がいじめられる」などの不安を抱えていることを直視し、勇気をもって教職員に伝えた子どもを守り通す。
- ・ 学校は勇気をもって伝えた子どもを守り通すことを宣言し、登下校時の付き添い等、いじめから守るための取り組みを保護者や地域と連携しながら、継続的かつ徹底して行い、周囲の子どもの安全を確保する。
- ・ 周囲の子どもが「いじめを見て見ぬふりしない」よう道徳や教育相談等で指導するとともに、いじめ撲滅にむけた生徒会等による主体的な取り組みを支援する。
- ・ 「いじめ問題を見過ごさないために」P17～「いじめ・人間関係トラブルの早期発見チェックポイント」や、P63「いじめの問題への取組についての点検項目（例）」を参考にし、これまでの教育活動を振り返り、評価・改善していく。

## ③ 保護者（家庭）・地域・関係機関との連携を深める

- ・ いじめが複雑化・多様化するなか、学校がいじめ問題を迅速かつ的確に解決できるようにするため、保護者や地域、関係機関との連携を図る。
- ・ 日頃より家庭訪問を行い、保護者とコミュニケーションをとり信頼関係を築く。
- ・ 必要に応じ、児童相談所・警察等の地域の関係機関・相談機関との連携協力を図る。特に、暴行や傷害、恐喝、強要、窃盗等、刑罰法規に抵触するものについては警察と連携・協力し対応する。

## ④ 「いじめ撲滅強化月間」での効果的な取り組みの強化を図る

- ・ 9月の全市一斉「いじめ撲滅強化月間」において、生徒の自主的・自発的な取組を中心に全校でいじめ撲滅に向けた取組を行う。
- ・ 9月の全市一斉いじめに特化したアンケートを効果的に活用し、全生徒にアンケート後の面談をすることにより、早期発見に努めるとともに誰もが相談しやすい体制整備に努める。
- ・ 本市の「いじめ撲滅スローガン」や「北九州市いじめ撲滅宣言」等を周知するとともに、本校のスローガン等を考えさせ、生徒の意識の高揚に努める。

## (3) 教師としてなすべきこと

### ① いじめを見抜く感性を磨くこと

いじめは教師の目の届きにくいところで起こる。「いじめ問題を見過ごさないために」P64「気付いていますか？チェック表」等を参考にし、教師自身がいじめを見抜く感性を磨くことが必要である。

### ② 不安や悩みを受容する姿勢を持つこと

生徒の話を最後まで傾聴し、不安や悩みを受け止め、問題の解決に向けて粘り強く対応する。

### ③ いじめは許さないという学級風土をつくること

道徳や学級活動の時間等でいじめの問題や命の大切さ、規範意識に関わる題材を取り上げる等、日頃からいじめを許さない学級風土をつくる。

### ④ 「自信」と「やる気」を引き出す授業に努めること

教師と生徒との信頼関係に基づいた授業を実践し、生徒の「自信」と「やる気」を引き出す。

### ⑤ 心の居場所づくりに努めること

生徒一人一人が自己存在感を感じられるように教師と生徒及び生徒相互の温かい人間関係を基に、安心できる心の居場所としての学級づくりに努める。

**⑥ 一人一人の心の理解に努めること**

連絡ノート等を通じた心の交流をしたり、休み時間や清掃時間も生徒と一緒に活動したりし、全生徒に1日に1回は声かけするよう心がける。

**⑦ 子どもの姿を見つめること**

いじめが起こっていない状態をしっかりと把握し、アンテナを高くして、生徒の少しの変化も見逃さないように日頃の生徒一人一人の様子を観察するとともに、学級の様子にも注意する。

**⑧ 教師間で連携・協力して問題の解決にあたる**

担任は開かれた学級経営に努め、問題を一人で抱え込むことなく、情報を共有し問題の解決に取り組む。

**⑨ 互いに個性を認め合う学級経営に努めること**

生徒の不得意なところや身体的な特徴がいじめのきっかけにならないように生徒同士が一人一人の違いを個性として認め合う学級経営に努める。

**⑩ いじめを受けた生徒を最後まで守ること**

いじめを受けた生徒の苦しみを受容し、「いじめられている子どもを守り通す」ことを言動で示し、毅然とした姿勢で対応する。

**⑪ 生徒や保護者からの声に誠実に答える**

日頃から、いじめられている子やその保護者の立場に立ち、誠実に解決しようとする姿勢や態度を示し、信頼関係の構築を心がける。

## 2 いじめの防止

### (1) 基本的な考え方

- ・ いじめはどの子どもにも起こりうる、どの子どもも被害者にも加害者にもなりうることを踏まえ、生徒をいじめに向かわせないための未然防止に全職員で取り組む。
- ・ 生徒同士、生徒と教職員の信頼関係を築く。
- ・ 規律正しい態度で授業や行事に主体的に参加・活躍できるような授業づくりを心がける。
- ・ 生徒が互いに認め合える人間関係・学校風土を生徒自らが作り出せるよう指導する。
- ・ 未然防止の取組の成果に関して、日常的に生徒の行動を把握したり、定期的なアンケートや生徒の欠席日数などで検証したりして、改善点について等を検討し、PDCAサイクルに基づく取組を継続する。

### (2) いじめ防止のための措置

#### ① いじめについての共通理解

- ・ いかなる場合でも、いじめ被害者の生徒を全面的に守る。
- ・ 被害生徒のいじめの訴えが被害妄想的であっても、被害生徒の訴えをまず誠実に聴き対応すること。
- ・ 生徒に対して、全校集会や学級活動等で校長や教職員が日常的にいじめ問題に触れ、「いじめは人間として絶対に許されない」との雰囲気为学校全体で醸成する。
- ・ 加害生徒からの仕返しや報復を恐れて教員に相談しない場合が多いので、被害生徒を仕返しや報復から絶対に守り抜くということを口頃から生徒に伝えておく。

#### ② いじめに向かわない態度・能力の育成

- ・ 道徳教育や人権教育を充実させるとともに、読書活動・体験活動を推進し、生徒の社会性を育む。
- ・ 社会体験・生活体験などの活動を通して他人の気持ちを共感的に理解できる豊かな情操を培う。
- ・ 自他の存在を等しく認め、お互いの人格を尊重することにより、ストレスをコントロールする能力を養う。
- ・ 生徒が円滑に他者とコミュニケーションがとれる能力を育む。

#### ③ いじめを生まないための指導上の注意

- ・ 授業についていけない焦りや劣等感などが過度のストレスにならないよう、一人一人を大切にしたりわかりやすい授業づくりを心がける。
- ・ 学級や学年、部活動等の人間関係を把握し、一人一人が活躍できる集団づくりに取り組む。
- ・ 教職員の不適切な言動により、生徒を傷つけたり、他の生徒によるいじめを助長したりすることがないよう細心の注意を払い指導を行う。
- ・ 教職員による「いじめられる側にも問題がある」という認識を絶対にしない。
- ・ 発達障害等について適切に理解したうえで指導に当たる。

#### ④ 自己有用感や自己肯定感の育成

- ・ 教育活動全体を通じ、生徒自らが活躍でき、他者の役に立っていると感じ取ることができる機会をすべての生徒に提供できるように努める。
- ・ 校外での体験活動を通して、家庭や地域の大人から認められているという思いが得られるように工夫する。
- ・ 困難な状況を自ら乗り越えられるような体験の機会を設け、自己肯定感を高める。
- ・ 自己有用感や自己肯定感は発達段階に応じて身につくことを踏まえ、小中一貫・連携教育を充実させ、幅広く、多様な目で生徒を見守る。

#### ⑤ 児童生徒自らがいじめ防止・撲滅について考える取組

- ・ すべての生徒が活動の意義を理解し、主体的に参加できる体制になっているかを教職員がチェックしながら適宜アドバイスしていく。
- ・ 生徒会を中心に生徒自身がいじめの防止を訴える取組を行う。  
(いじめ防止のため啓発ポスター作成・いじめ撲滅宣言の採択・クローバーキャンペーンの取組等)

### 3 いじめの早期発見

#### (1) 基本的な考え方

- ・ 生徒や保護者からのいじめの訴えはもちろんのこと、その兆候等の危険信号についてどんな些細なものであっても真剣に受け止め、すみやかに教職員相互において情報交換するなどにより、適切かつ迅速な対応を図る。
- ・ いじめは大人の目に付きにくい時間や場所で行われたり、遊びやふざけあいを装って行われたりするなど、気づきにくい形で行われることを共通理解したうえで把握に努める。
- ・ 些細な兆候を見逃さず、「いじめではないか」との疑いを持ち、隠したり軽視したりすることなく複数の教職員で関わり、積極的に認知する。

#### (2) いじめ早期発見のための取組

##### ① アンケート

- ・ 学期に1回以上、無記名でいじめに特化したアンケートを行い、いじめの実態を把握する。
- ・ 9月に行われる全市一斉のいじめに特化したアンケートを活用し、学校全体でいじめの実態を把握する。
- ・ 保護者向けのアンケートを行い、家庭において子どもからの訴えがないかを把握する。

##### ② 教育相談体制

- ・ 学期に1回以上の定期的な教育相談によりいじめの実態の把握に努める。
- ・ 教師と生徒の日常のコミュニケーションをより大切にし、いじめを訴えやすい雰囲気をつくる。
- ・ 家庭訪問等を通して教師と保護者の好ましい人間関係づくりに努め、いじめに関して相談しやすい雰囲気を作る。
- ・ 生徒が誰にでも相談できるような体制づくりを行う。
- ・ 気になる生徒の情報を全教職員で共通認識しておく。

##### ③ その他

- ・ 休み時間や放課後等さまざまな場面で生徒を見守り、動きを把握する体制づくりを行う。
- ・ 連絡ノートによる家庭連絡等を通して、生徒や保護者からの情報に耳を傾け積極的に収集する。
- ・ ネットパトロールによって得た情報をいじめと判断した場合、即座に対応できる体制をとっておく。

## 4 いじめに対する措置

<p><b>(1) 基本的な考え方</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 発見・通報を受けた場合は特定の教職員で抱え込まず、速やかに管理職に報告し、組織で対応する。</li><li>・ 被害生徒を守り通すとともに、加害生徒には毅然とした態度で指導する。</li><li>・ 全教職員の共通理解の下、保護者の協力を得て、関係機関と連携し対応する。</li></ul>
<p><b>(2) いじめの発見・通報を受けたときの対応</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 遊びや悪ふざけなど、いじめと疑われる行為を発見した場合、その場でその行為を止める。</li><li>・ 生徒や保護者等から「いじめではないか」との相談や訴えがあった場合は真摯に傾聴する。その際、いじめられた生徒やいじめを知らせてきた生徒の安全を確保する。</li><li>・ 発見・通報を受けた教職員は一人で抱え込まず、速やかに管理職に報告し、校内いじめ問題対策委員会等で情報共有する。</li><li>・ 速やかに関係生徒から事情を聴き取り、いじめの事実を確認する。</li><li>・ 校長が事実確認の結果を教育委員会に報告する。</li><li>・ 重大な暴力行為や金品強要等を伴ういじめが生じる恐れがある場合は警察署に相談または通報する</li></ul>
<p><b>(3) いじめられた児童生徒又はその保護者への対応</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ いじめられた生徒から事実関係の聴き取りを行う。</li><li>・ いじめられている生徒や保護者に「最後まで守り抜くこと」や「秘密を守ることを」はっきりと伝える。</li><li>・ 生徒の個人情報の取扱い等、プライバシーには十分に留意する。</li><li>・ 事実確認のための聴き取りやアンケート等により判明した情報は家庭訪問等で速やかに保護者に伝える（即日対応）。</li><li>・ いじめられた生徒にとって信頼できる人（友人や教職員、家族等）と連携し、寄り添い支える。</li><li>・ 安心して学習やその他の活動に取り組むことができるよう、必要に応じて別室で学習させる。</li><li>・ 状況に応じて、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなどの協力を得る。</li><li>・ いじめが解決したと思われる場合でも継続して見守る。</li></ul>
<p><b>(4) いじめた児童生徒への指導又はその保護者への助言</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ いじめた生徒から事実関係の聴き取りを行う。</li><li>・ いじめがあったことが確認された場合、組織的に対応し、謝罪や二度としないことの約束等を行う。</li><li>・ 聴き取りした内容を速やかに保護者に連絡し、事実に対する保護者の理解を得る。</li><li>・ 保護者と連携して、対応を適切に行えるよう協力を求め、継続的な助言を行う。</li><li>・ 生徒にいじめは絶対に許されない行為であることを理解させる。</li><li>・ いじめた生徒が抱える問題にも目を向け、継続的に指導・支援する。</li></ul>
<p><b>(5) いじめが起きた集団への働きかけ</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 観衆や傍観者の生徒に対しても自分の問題として捉えるように指導する。</li><li>・ いじめをやめさせることはできなくても、誰かに知らせる勇気を持つよう伝える。</li><li>・ はやしたてるなど同調していた生徒に対してはそれらの行為はいじめに加担する行為であることを理解させる。</li><li>・ 学級での話し合いなどを通して、いじめは絶対に許されない行為であり、根絶しようという態度を育む。</li></ul>
<p><b>(6) ネット上のいじめへの対応</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ ネット上の不適切な書き込み等は被害の拡大を避けるため、直ちに削除する措置をとる。</li><li>・ 生徒の生命、身体又は財産に重大な被害が生じるおそれがあるときは、直ちに警察署に通報し、適切に援助を求める。</li><li>・ 生徒が悩みを抱え込まないよう、法務局・地方法務局におけるネット上の人権侵害情報に関する相談の受付など、関係機関の取組を周知する。</li><li>・ 情報モラル教育を進めるとともに、保護者においてもこれらについての理解を求める。</li></ul>

## 5 いじめの早期発見・早期対応のための年間計画

1学期		2学期		3学期	
期日	活動内容	期日	活動内容	期日	活動内容
4月6日	職員会議①（2・3年生生徒理解）	9月1日 ～30日	いじめ撲滅強化月間	1月23日	いじめに関するアンケート⑤
4月25日	学活（入学してからアンケート）	9月19日	全市一斉いじめに特化したアンケート②	1月25日	教育相談③（いじめに関するアンケートを基に）
5月9日	いじめに関するアンケート①	21日 22日 25日 26日	面談	2月2日	校内研修会③（アンケート結果を基にした取組の確認）
5月12日	職員会議（生徒理解）	9月26日	学級活動（いじめ問題に関する取組）	3月14日	職員会議③（1年間の取組の点検・評価、生徒理解等）
6月6日	いじめに関するアンケート②	10月10日	いじめに関するアンケート③		
6月12日 ～16日 19日 20日	教育相談①（いじめに関するアンケートを基に）	11月1日	いじめに関するアンケート④		
7月20日	職員会議②（1学期の取組の点検・評価、9月いじめ撲滅強化月間の取組の確認等）	11月7日 ～10日	教育相談②（いじめに関するアンケートを基に）		
8月21日	校内研修会①（生徒理解）	12月4日	校内研修会②（アンケート結果を基にした取組の確認）		

※ 必要に応じて、学年ごとの取組を計画してください。

## 6 いじめ防止等の対策のための組織

### (1) 校内いじめ問題対策委員会

#### ① 校内いじめ問題対策委員会活動方針

- ・ 基本方針に基づく取組の実施や具体的な年間計画の作成・実行・検証・修正の中核
- ・ いじめの相談・通報の窓口
- ・ いじめの疑いに関する情報や生徒の問題行動などに係る情報の収集と記録、共有
- ・ 重大事態となる恐れのあるいじめの疑いに係る情報があったときには緊急会議を開き、いじめの情報の迅速な共有、関係生徒への事実関係の聴き取り、指導や支援の体制・対応方針の決定、保護者との連携等の対応を組織的に実施するための中核

#### ② 校内いじめ問題対策委員会組織

##### 《教職員関係者》

役職	氏名	役職	氏名
校長	若松 英昭	学年生徒指導	中尾 隆
教頭	河村 梅治	学年生徒指導	上杉 由理
生徒指導主事	岩本 哲	学年生徒指導	宮田 裕幹
養護教諭	原田 沙耶		

##### 《外部関係者等》

役職	氏名	役職	氏名
スクールカウンセラー	西角 舞子	スクールソーシャルワーカー	井口 奈奈
スクールカウンセラー	稲富 典子	スクールサポーター	松尾 繁登

#### ③ 校内いじめ問題対策委員会活動計画

※PDCAサイクルに基づいた取組を計画する

1学期		2学期		3学期	
期日	活動内容	期日	活動内容	期日	活動内容
4月6日	組織発足・顔合わせ 委員会活動方針確認 いじめ防止基本方針の確認	9月1日	夏季休業中の情報共有	2月1日	取組評価アンケート③ 年間活動の評価 次年度のいじめ防止基本方針および委員会活動方針検討、確定
7月6日	取組評価アンケート実施① 1学期の状況確認 情報共有 夏季休業中の連絡体制の確認 1学期の委員会活動の点検・評価及びいじめ防止基本方針の検討 2学期の活動方針検討	12月7日	取組評価アンケート実施② 2学期の状況確認・情報共有 いじめアンケート及び面談結果について 冬季休業中の連絡体制の確認 2学期の委員会活動の点検・評価及びいじめ防止基本方針の検討 3学期の活動方針検討		

※ 定例会は月に1回行う。



## (2) 関係機関・相談機関との連携

### ① 連携の必要性

次のような状況がある場合、指導の効果を見極め、適切な時期に適切な関係機関と連携を図る。

- ・心理的なケアが必要であると判断した場合
- ・被害生徒の安全が脅かされるおそれがある場合
- ・生徒や保護者が、教師には相談しにくい状況にあると判断した場合
- ・問題行動を繰り返す生徒の処遇や、家庭環境に配慮を要する生徒の対応に関する場合
- ・学校間・異年齢にまたがる集団による場合 等

### ② 連携のための配慮事項

- ・ 関係機関・相談機関との連携は、校長が判断し、学校の指導体制の一環として行う。
- ・ 学校が関係機関から連絡を受けた場合は、校長が教育委員会に報告する。
- ・ 安易に関係機関や相談機関に依頼したり、連携後に任せきりにならないようにする。
- ・ 保護者に関係機関・相談機関を勧めるときはその不安な気持ちを十分に受け止め、保護者が学校や教師に不信感を生まないように十分に配慮する。

### ③ 関係機関・相談機関一覧表

関係機関		相談機関	
機関名	連絡先	機関名	連絡先
教育委員会指導部 指導第二課	5 8 2 - 2 3 6 9	24時間子ども 相談ホットライン	8 8 1 - 4 1 5 2
特別支援教育相談センター	9 2 1 - 2 2 3 0	ハートケア北九州 (北九州少年サポートセンター)	8 8 1 - 7 8 3 0 (月～金 9時～ 17時45分)
子ども総合センター	8 8 1 - 4 5 5 6	子ども人権110番 (法務局・地方法務局)	0 1 2 0 - 0 0 7 - 1 1 0 (月～金 8時3 0分～17時15 分)
精神保健福祉センター	5 2 2 - 8 7 2 9	いのちの電話	6 7 1 - 4 3 4 3 (24時間)
		チャイルドライン	0 1 2 0 - 9 9 - 7 7 7 7 (月～土 16時 ～21時)

## 7 重大事態への対処

### (1) いじめの疑いに関する情報

- 校内いじめ問題対策委員会でいじめの疑いに関する情報の収集と記録、共有
- いじめの事実の確認を行い、結果を教育委員会へ報告

### (2) 重大事態の発生

#### ○ 教育委員会に重大事態の発生を報告（※教育委員会から市長等に報告）

- ・ 「生命、心身または財産に重大な被害が生じた疑い」（児童生徒が自殺を企図した場合等）
- ・ 「相当の期間学校を欠席することを余儀なくされている疑い」（年間30日を目安。一定期間連続して欠席しているような場合などは、迅速に調査に着手）
- ・ 「児童生徒や保護者からいじめられて重大事態に至ったと言う申立てがあったとき」

### (3) 教育委員会が、重大事態の調査の主体を判断

#### ① 学校を調査主体とした場合

※ 教育委員会の指導・支援のもと、以下のような対応に当たる。

##### ア 校内いじめ問題対策委員会を活用

- ※ 組織の構成については、専門的知識及び経験を有し、当該いじめ事案の関係者と直接の人間関係又は特別の利害関係を有しないスクールカウンセラー等の第三者の参加を図り、当該調査の公平性や中立性を確保する。
- ※ いじめ防止対策推進法第22条に基づく「校内いじめ問題対策委員会」を母体として、当該重大事態の性質に応じて適切な専門家を加える。

##### イ 校内いじめ問題対策委員会で、事実関係を明確にするための調査を実施

- ※ 客観的な事実関係を速やかに調査し、いじめ行為の事実関係を可能な限り明らかにする。
- ※ 学校に不都合なことがあっても、事実にしっかりと向き合う。
- ※ これまでに先行して調査している場合も、調査資料の再分析や必要に応じて新たな調査を実施する。

##### ウ いじめを受けた児童生徒及びその保護者に対して情報を適切に提供

- ※ 調査により明らかになった事実関係について、適時・適切な方法で経過報告を行いながら情報を適切に提供する。
- ※ 関係者の個人情報に十分な配慮をする一方、いたずらに個人情報保護を楯に説明を怠らないようにする。
- ※ アンケート結果をいじめられた児童生徒や保護者に提供する場合があることを念頭に置き、調査に先立ちその旨を調査対象の在校生や保護者に説明する。

##### エ 調査結果を教育委員会に報告（※ 教育委員会から市長等に報告）

- ※ いじめを受けた児童生徒またはその保護者が希望する場合には、いじめを受けた児童生徒又はその保護者の所見をまとめた文書の提供を受け、調査結果に添える。

##### オ 調査結果を踏まえた必要な措置

#### ② 教育委員会が調査主体となる場合

##### ア 教育委員会の指示のもと、資料の提出など、調査に協力